

こむぎ通信

令和 7 年 2 号

赤かび病の防除を徹底しましょう！

出穂期は平年並～やや早い状況となっています。

赤かび病の防除は開花始め～開花期に 1 回目、
その 7 日後に 2 回目を行いましょう。

1 生育状況

県生育観測ほは、草丈は平年より 6.8cm 長く、 m^2 当たり茎数は平年より 267 本少ない。また、出穂期は平年より 2 日早い 5 月 18 日であった。

地区生育観測ほは、草丈は 49.4cm で平年より 3.3cm 短く、 m^2 当たり茎数は 483 本で平年より 91 本少ない。

地域全体をとおして、うどんこ病、赤さび病の発生は少ない。

表 1 生育観測ほの生育状況

品種：ネバリゴシ

地点	年次	5月9日調査		生育ステージ(月/日)	
		草丈(cm)	茎数(本/ m^2)	出穂期	開花期
相坂 (県生育観測ほ)	本年	60.2	624	5/18	
	平年	53.4	891	5/20	5/27
	前年	67.7	867	5/12	5/19
赤沼 (地区生育観測ほ)	本年	49.4	483		
	平年	52.7	574	5/21	5/27
	前年	77.0	730	5/10	5/18

※平年値は、相坂が平成23年～令和6年産、赤沼が平成19年～令和6年産の平均値

※平年値、前年値は、5月10日調査

2 防除対策

【うどんこ病】

(1) うどんこ病は、発生初期と 7～10 日後の 2 回、薬剤散布を行う。特にネバリゴシはうどんこ病に弱いので、蔓延させないように発生状況に注意する。

(2) うどんこ病の薬剤散布を 1 回とした場合は、止葉直下葉での発生直後に表 2 の薬剤を散布すると効果的に抑えることができ、収量・品質低下に対する影響も小さくなる。

【赤かび病】

- (1) 赤かび病が産生するカビ毒に汚染されると出荷流通停止となることから、本病に対する防除を徹底する。
- (2) 赤かび病は出穂期～乳熟期にかけて降雨や濃霧が続くと発生しやすいので、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤を散布する。赤かび病の発生源の一つである紅色雪腐病の発生が認められたほ場では薬剤防除を徹底する。



- (3) ベンズイミダゾール系、QoI 剤は、うどんこ病及び赤かび病に対し耐性菌が出やすいので連用しない。特に紅色雪腐病の発生したほ場ではベンズイミダゾール系剤は使用しない。

【注意事項】

- (1) うどんこ病等の対策としてアミスター20フロアブル〔FRAC:11〕を散布した場合、かび毒の産生量を増加させた事例があるので、出穂後は使用しない。
- (2) 刈り遅れは、かび毒の産生を助長する原因となることから、適期収穫を確実に行う。

表2 系統別防除薬剤一覧

薬剤系統名 (FRACコード)	薬剤名	対象病害	
		赤かび病	うどんこ病
DMI 剤 (3)	シルバキュアフロアブル	○	○
	トリフミン水和剤	○	○
	ワークアップフロアブル	○	○
QoI 剤 (11)	ストロビーフロアブル	○	○
	アミスター20フロアブル		○
ベンズイミダゾール系 (1)	トップジンM水和剤	○	○

※対象病害欄の○は登録ありを示す。

★農薬を使用する際には、必ず最新の農薬登録情報を確認してください★